

活力ある香川を目指して

香川県立高松高等学校 1年 白井佑果

1 はじめに

香川県の人口ピラミッドを見ると、これからも少子高齢化社会が進んでいくことは、まぎれもない事実であり、人口は右肩下がりで減少が進む予測となっている。私の住む地域も少子高齢化社会が進み、農業、医療、教育などいろいろな面で課題が山積している。そこで、私たちがこれからの活力ある香川を作っていくためにはどうすればよいかを考え、元気にできる提案をいくつか行っていきたい。

2 香川県の現状と課題

香川県政策部統計調査課が出している「令和 2 年度香川県人口移動調査報告」をもとに香川県の現状をみると、次のような報告がなされている。香川県の人口は令和 2 年に 95 万 1 千人となり平成 12 年以來 21 年連続で減少し続けている。令和 2 年中には、7,337 人減少している。

(1) 自然増減（出生と死亡の関係）

自然増減についてみると、平成 15 年を境に死亡数が出生数を上回り自然増減が減少に転じた。これは、少子高齢化が香川でも急速に進む要因であり、令和 2 年には 5,956 人の減少となっている。特に、出生数については令和 2 年度は 6,255 人となり過去最少となっている。この背景には、晩婚化などいろいろな課題が考えられるが、この傾向を変えることは難しいと考えられる。しかし、出生数が減少している中でも、若者世代が出産・育児を安心して行える環境づくりはより重要度を増してくると考える。

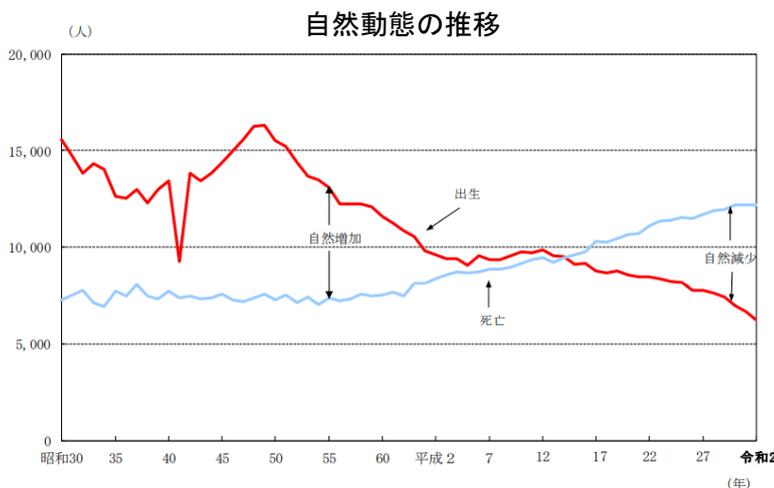


図 自然動態の推移

(令和 2 年度香川県人口移動調査報告より抜粋)

(2) 社会増減（転入と転出の関係）

社会増減についてみると、平成12年以降はほとんど転出超過が続いている。この転出超過を防ぐために転入を期待した政策を増やしていけばいいのではないかと考えてみたが、調べるうちに、すでにいろいろな政策が行われていることを知り、これ以上爆発的に転入を増やすのは難しいと感じた。また、周りの県も少子高齢化で同じ悩みを抱えていることを考えると、地方どうして人材を奪いあうことは、日本全体のことを考えると得策ではないと考えた。そこで、転出する人口を減らすこと、一旦転出しても香川に帰ってくる可能性を残すことに重点を置いた政策を行うことが必要なのではないかと考えた。

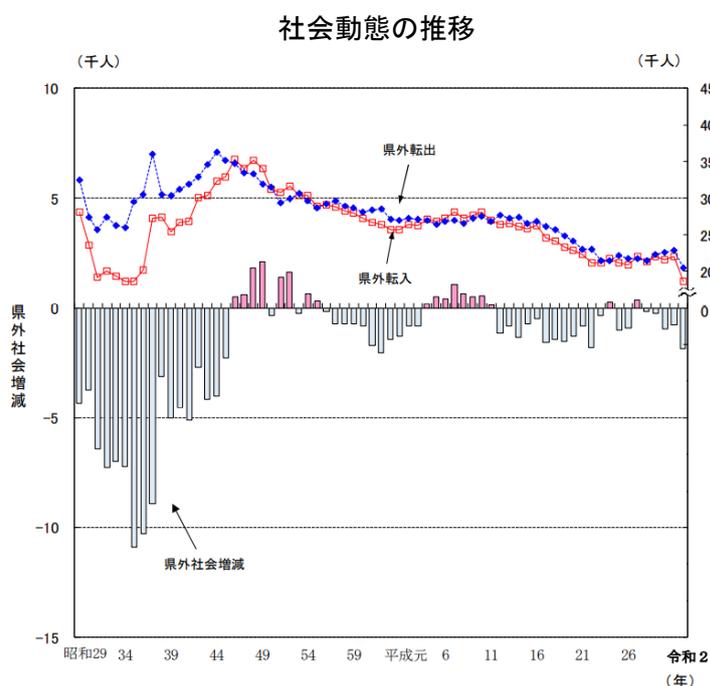


図 県外社会動態の推移

(令和2年度香川県人口移動調査報告より抜粋)

3 対策内容

(1) 県外進学してもまた香川に帰りたい、香川を支えたいと思えるような人材の育成

地元を愛する人材を育成できれば、県外進学をしても地元に戻ってくるし、県外に出たとしても香川をサポートしようと思うのではないかと考える。具体的には、小、中、高校の12年間を通して、郷土香川の魅力を学ぶカリキュラムを独自開発することである。私は、昨年、キャリアパスポートというものを渡された。これは小学校入学から高校卒業まで継続的に使用していく唯一のものである。このように香川で過ごす12年間をうまく使い、香川型のものとして統一すれば、12年間もかけて香川の魅力を学ぶことができるのではないかと考える。ここで、香川の魅力を知り、香川を大切に想う気持ちを育てれば、香川を支える人材

を育成することができるのではないだろうか。

(2) 子育てしやすい環境づくり

子育て世代が考える条件は、医療サポート体制の充実度と教育環境である。私の地域でも小児科が閉院し、次のかかりつけ医を探すのに苦労した。また、さぬき市民病院では、一時期産婦人科でお産ができないという事態になり、新聞等で報道された。事実、日本医師会が提供する JMAP 地域医療情報システムのデータを見ると、表のように香川は人口 10 万人あたりの施設数が小児科や産婦人科に関しては低く、子育てしやすい環境づくりを行うためにも、この部分を改善することが重要ではないかと考える。そこで、医学創造コースのような専門的なコースを高校に設置し、香川大学とタイアップして県独自の人材の育成を早い段階から進め、医師確保に努める。

	香川	全国
小児科	12.91	17.02
産婦人科	2.46	3.76

表 人口 10 万人あたりの施設数の比較

教育環境の面では、高松へ教育環境を集中させるのではなく、オンライン教育等をうまく使い、地域の学び舎を残しつつ、生徒一人ひとりに地域と連携した手厚い教育が可能となる取り組みを行う。また、県外進学をしなくともオンライン等を有効に活用して、それと同様な効果が得られるような教育環境を整備し、地方にいても都会と同じ教育が受けられる機会を増やす。

(3) 魅力的な仕事=今あるものに+α させる

オリンピックで活躍した宇山選手が愛用するフェンシンググローブのように、香川には昔から地域の特産がたくさんある。しかし、高齢化が進み、技術が引き継がれづらくなっている。そこで地域ごとにブランド化を推し進め、地域で技術を伝承することを進める。ブランド化するための開発サポートを県が行い、それをインターネットを活用して市場にのせる。しかし、インターネットに参入することは、高齢者にはハードルが高い。そこで、若年者層と協力し、高齢者層と若年者層の両輪でブランド化を推し進めていく。また、「うどん県モール」を県が運営し、希望がある商品の掲載をサポートする。さらに、これをアンテナショップとしても活用する。

(4) 廃校利用

文部科学省の公立学校の都道府県別廃校発生数(平成 14 年度～平成 29 年度)をみると、香川県で累計で 95 校にのぼっている。しかし、なかなか活用は進んでいない。そこで、廃校オフィスを提案したい。コロナの感染拡大により、仕事のオンライン化が進み、都市部(東京)にいなくても同じ仕事ができるようになった。また、SNS の発達により、地方にいても簡単に情報が発信できるようになった。統廃合で使わなくなった学校を、スモールオフィスの集合体にしてイノベーション企業を応援し、香川発信の企業を育て、若者に夢をつかむチ

チャンスを与える場としたい。さらに、一部を、高等学校や大学などのベンチャーチャレンジの場として教育の現場に提供し、人材育成に生かしたい。

(5) ICT 先進県、香川

提案したようなことの中にも、ネットワーク環境が不十分であれば、実現が難しいものも多い。そのためすべての分野において ICT 先進県となれるようなインフラの整備を進めていく必要がある。幸い香川県は面積が狭いこともあり、インフラ整備には適していると考えられる。また、災害の少ないことも強みである。高松中心の先進都市をつくるのではなく、全県で整備を行い、地域を取り残さずに、県全体で超高速情報通信網を確立していきたい。

4 終わりに

「人は宝」という言葉を聞いたことがある。香川を元気にするためには、人材の育成が何より大切だ。思い切った方法や長期の視点にたった人材育成を行いながら、環境整備も併せて進めることでこれからの香川を活力ある県にしていかなければならない。そのために、いろいろな視点から課題を探し、発信・提案を行うなかで県民一人ひとりが夢をかなえられる県になればと思う。また、私自身も郷土香川に少しでも尽力できる人間に成長したい。

[参考文献]

令和 2 年度香川県人口移動調査報告 香川県政策部統計調査課

日本医師会 地域医療情報システム

<https://jmap.jp/cities/detail/pref/37>

文部科学省 公立学校廃校施設活用状況実態調査の結果について

https://www.mext.go.jp/content/20210208-mxt_sisetujo-000001234_9.pdf